

ドミノ倒し。誰もが一度は遊んだことがあるだろう。コトリ、コトリ。一つ、一つと牌を並べる。そろり、そろり。倒さぬように慎重に。握った手には汗がにじむ。少しの油断が命取りだ。

牌がきれいに並びあがる。あなたはほっと息をつく。しかし、それはまだ完成ではない。倒れるためだけに並んだ牌たちはドミノ・ゲームを完成させる、あなたの一押しを待っている。

舞台は真夏の東京駅。いつもと変わらぬ平和な景色に、静かに牌が並べられていく。契約書等待つ締め切り間際のオフィス、競争相手に下剤を盛られた子役、芝居を打って女を捨てようとする青年。牌は続々と持ち場に向かう。待ち合わせ場所に行けない老人、サークルの長を争う若者、俳句が趣味の元警官。

総勢28もの登場人物は誰もがそれぞれの思惑に動く。見知らぬ人々がすれ違う刹那、運命はその手で牌を押す。

倒された牌が描きだす抱腹絶倒のパニックコメディ。

本を開くといきなり28人分の登場人物紹介が表れる。こんなにたくさんはとても覚えきれない。どうしたものだろうか。

だがその心配は徒労に終わる。物語が進んでゆくに連れ、皆がはっきりとした個性を持って、生きているように立ち現れてくるからだ。本来なら必要のないはずの人物紹介は筆者の遊びであり、それ自体が演出効果を持った小説の一部でもあるのだ。

生き生きとした人間味あふれる登場人物たち。それぞれの物語はやがて訪れる一瞬に向かって絡み合っていく。その過程で演じられるテンポの良いドタバタ喜劇もさることながら、牌が押された瞬間から一気に押し寄せるパニック劇は圧巻の一言だ。

ストーリーテラー恩田陸が描く空前絶後の大喜劇。この小説を今から読めるあなたがうらやましい。



『ドミノ』（角川文庫）

著者：恩田陸

定価：580円（税込）